

文芸研ニュース

2020年5月9日
—NO. 153—

発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局

	目次
卷頭 上西委員長より	1
文芸研との出会い(沼澤先生)	7
サークル便り(福崎先生)	8
青年学校便り(佐々木先生)	11
事務局通信	12



福崎家の天理出張

■はじめに

沈丁花ぼつぼつ開花する二月パンデミックは列島走る
(北九州市 嶋津裕子)

手洗いとマスク歎(うがい)で迎え撃つ戦争末期の竹槍の如く(三郷市 木村義熙)

テレビへも感染したか新型のコロナウイルス日すがら映る(常陸大宮市 和田行男)

人を避け人に避けられ雑踏の街をマスクとマスクの孤独(福島市 美原凍子)

この国が「想定外」に弱きことフクシマでもう知つていたのに(水戸市 中原千絵子)

(三月一五日「朝日歌壇」より)

新型コロナウイルスの拡大で戦争以外では初の選抜高校野球中止が報じられています。突然の全国一斉の小学校・中学校・高校・特別支援学校の休校要請で、子どもたちとの格別大切な時期を奪われて現場は大変な学期・年度末でした。イベント自粛要請の影響で関東の「国語の教室」等も中止せざるを得ませんでした。二〇一一年東日本大震災

第五五回山口大会の成功をめざして
上西信夫(文芸研委員長)

直後の第四六回青森大会も実施か否か逡巡しましたが、その時以来の局面です。五月実践研、山口大会が予定通り開催できることを願うばかりです。

■四度目の山口大会（①一九八三年一八回大会 ②一九九二年二七回大会 ③一〇〇二年三七回大会 そして④一〇二〇年五五回大会）

山口での文芸研運動は、福本雄一（光）・嶋村伸矢（宇部）・林道彦（山口）・田阪育昌（下関）さんらが拓き、繋げ、広げ、岩国の堀浩一・棚倉剛・斎藤尚生・植木数弥・山中吾郎・中村登志子・清田和幸・國田真美・西本進次・石田哲也さんらが続いて、酒井大輔さんら山口東サークルの若い教師たちに受け継がれ現在に至っています。

山口の地での一回目は、第一八回山口大会（一九八三年）。テーマは、「この学年でどんな力を育てるか—『国語』科関連・系統指導のめざすもの」。第一三回奄美大会の「国語」科教育の未来像・第一四回輪島大会の「国語」科教育の全体像の提起を受けて、第一五回福岡大会、第一六回大阪大会、第一七回東京大会を経て、関連・系統指導の理論化・実践化が急速に進んだ中での大会でした。盆地特有の猛暑の中での、分科会場の湯田小学校の窓を取つ払い、会場に氷柱を立てての暑い熱い討議を思い出します。

二回目の第二七回大会テーマは、「美と真実をめざして」。

虚構論に基づく西郷文芸学の美的定義—文芸の美とは、異

質な（あるいは異次元の）矛盾をするものを止揚・統合する弁証法的構造の体験・認識・表現・創造である—の確立の時期、「名詩の美学」「名句の美学」（黎明書房）を世に問うた時期とも呼応します。分科会提案教材にはユーモア文芸やファンタジー文芸が多いのも大会テーマを意識したことでした。

その後『人間観・世界観を育てる国語教育』の時期を経て、三回目の第三七回大会（二〇〇二年）は、予定していた地域での大会が困難になり急遽山口が引き受けてくれた大会でした。総合的な学習の時間導入にともない他教科との関連指導を視座して、大会テーマは「教科学習の確立と総合学習の展開—その統一 意味を問う教育をめざして」。国語科と他教科・領域を関連させるものは、教育的認識論—ものの見方・考え方です。ものの見方・考え方（認識方法）を教科内容として位置づけるのは、人間の真実やものごとの本質・法則・真理・価値・意味をわかる力を育てることであり、そのことを前面に掲げての大会でした。また、その後の大会テーマ『価値・意味を問う教育』『虚構の方法を学ぶ』に橋渡しする大会でもありました。

そして今回の五五回大会は、文芸研を支える二つの基盤—変革主体に育てる『ものの見方・考え方』（教育的認識論）と西郷文芸学における虚構論をふまえた究極のテーマ『美と真実』を大会テーマに文芸研のめざす原則的・普遍的課題に挑む大会を創りたいと思います。

一連の「桜疑惑」報道でも可視化できたように、保守岩盤の固い山口での大会は日本の縮図でもあります。この地での芸研大会が質量とともに成果を残すことが、今後の芸研運動のあり方を決定づけます。現地一五〇、全国一五〇の参加目標を何としてもやり切りたいと思います。

■『視点の転換』についての整理

(この「整理」は各サークルへ送信済み。『全集』⑬巻・『名詩の世界』①巻・『文芸教育』八七号参照)

二〇一九冬・実践研の中で『視点の転換』をめぐる論議(「少年の日の思い出」「理髪店にて」)があり、その理解を共有できたかというと不十分だったと感じていますので補足します。

『視点の転換』の概念規定は広く(語り手が変わる『視点の転換』をはじめ、『視点の移動』なども『視点の転換』と包括)、そのことが『視点の転換』の理解に混乱を起こしています。西郷先生が自らの理論構築は「自己革新の連続だつた」と述べているように、西郷文芸学理論は内と外からの必要に迫られて整合性を常に検証し、体系化を不斷に追求してきました。当然のことながら従来も『著作集』と『全集』の不整合があり、さらに「西郷文芸学新展開」(『文芸教育』八七号・二〇〇八年)確立以前と以後では大きく変わり、現在の『視点の転換』に関するサークル内部の疑問・混乱は、この広義性と歴史性の錯綜に起因します。

まず広義性について。〈外の目〉から〈内の目〉あるいは〈内の目〉から〈外の目〉に変わることが狭義の意味の『視点の転換』です。(これも語り手の〈外の目〉が視点人物の〈内の目〉に視角が転換したとも言えますが、「西郷文芸学新展開」確立以後は『相変移』したと表現した方がいいかもしれません。「三日月」の例)

視点人物の〈内の目〉間の転換(文法的・人称的視点論でいえば三人称限定間の視点の転換)が『視角の転換』で、『視点の転換』と『視角の転換』は『教師のための文芸学入門』の当初から厳密に区別されています。サークル内部では自明のことですが、大会参加者にはわかりづらいところです。

さらに『視線の移動』(「山頂から」「風土」「雪」「キリン」)、『視野の転換』(「竹」)、『視点の屈折』(聴覚から視覚、視覚から聴覚)も含めて『視点の転換』と包括していた時期もあります。また、『回想視点』『二重視点』など「西郷文芸学新展開」確立以前の視点論に関する規定が、文法的人称的視点論の影響から完全に脱していない理論構築期と呼応します。

以前は「少年の日の思い出」(中高分科会提案教材)・「理髪店にて」(文芸学入門)は、語り手が変わる『視点の転換』と分析・実践していたことができました。『全集』にも何箇所か見出すことができ、今回の二教材の分析に影響しています。詩「かたつむり」や「わらぐつの中の神様」の分析

も「少年の日の思い出」「理髪店にて」同様に以前は語り手が変わる——他の話者に変わる（複数の話者）説をとつていたことがありました。

問題は「理髪店にて」等の他の話者に変わる（複数の話者）説という以前の《視点の転換》の構造分析です。「かたつむり」も「西郷芸術新展開」確立以前は「二人の話者」説をとつた分析・実践がありました。西郷模式図で〈話者〉（語り手）と〈話主〉（話し手）の区別が明確になり、例えば他研究団体の「*ごんぎつね*」の語り手は「茂平」だという説がもたらした混乱を解消しました。「かたつむり」は、二人の〈話者〉（語り手）ではなく二人の〈話主〉（話し手）の対話を〈話者〉（語り手）の「わたし」が〈聴者〉（聞き手）に向かつて語るという構造です。散文であれば奇数連、偶数連にそれぞれ「」（鉤括弧記号）をつけるところです。今回の「かたつむり」の分析は「西郷芸術新展開」を踏まえたものになつていきました。

「わらぐつの中の神様」も、〈話者〉（語り手）の「わたし」が「マサエ」の側から・寄り添つて・重なつて1場面から語り始め、2場面は〈おばあちゃん〉が話したことをおばあちゃんは〈話主〉同じ〈語り手〉が〈聞き手〉に語るという構造です。話者は一貫して一人称の「わたし」です。（話主・おばあちゃんの台詞は方言で話されます。2話者がおばあちゃんに変わつたとしたら、地の文も方言の

語り口調・話体になるはずです。）視点人物は1・3場面は〈マサエ〉で、2場面は〈おみつさん〉に変わります。この作品も《視角の転換》です。

「理髪店にて」に話題を戻すと「西郷芸術新展開」確立以前は、〈前連は「俺」の視点（「俺」が話者）からとらえられた世界、後連はその「俺」が、「客」として登場します。今度はその「俺」が、別の話者から見られている。対象化されているのです」と分析されていました。（『全集』⑩巻）

「西郷芸術新展開」（「文芸教育」八七号）で従来の文法的人称的視点論との完全な決別・清算があり、西郷模式図（モデル）の完成で〈どんな場合でも、語り手は一人称単数の「わたし」です〉と断言し、語り手論が整理されます。（「文芸教育」八七号四四頁）その語り手の「わたし」が聞き手（聴者）に向かつて一貫して語りはじめ、語り終わる。その世界を語りの世界として紡ぎだします。結論的に言えば、語り手が途中で変わる《視点の転換》＝複数の語り手はあり得ないということになります。

「理髪店にて」の場合は、「わたし」がある時は視点人物に、ある時は別の語り手に代わるということはあり得ません。〈語り手の「わたし」が「だれ」を対象とするかによる分類—視点と対象の相関、遠近法が問題です。）（「文芸教育」八七号四五頁）前連では語り手「わたし」の対象は〈俺〉にあり、〈俺〉にスライド・オーバーラップして重なり（〈俺〉

の〈内の目〉・視点人物となり）語り手の「わたし」が相変移して視点人物の〈俺〉になります。後連では語り手「わたし」が〈俺〉から離れて対象が〈理髪師〉と〈彼〉（前連の〈俺〉）に移り、〈外の目〉で対象化して語ります。この詩では、語り手「わたし」が前連で〈俺〉の〈内の目〉に重なり、視点人物の戦争体験を思想化できない拝金主義者の心の内を聴者・読者に見せ共体験させます。後連では〈客〉となつた〈俺〉が前連の〈そんな話〉を〈理容師〉に向かって話します。その様子を語り手の「わたし」が〈外の目〉で聴者に向かつて語るという構造です。従来の〈内の目〉から〈外の目〉へという〈視点の転換〉とも言えますが、視点人物の〈俺〉から語り手「わたし」へ〈相変移〉したと言う方が整合性があります。従来〈視点の転換〉と呼ばれていたことは、「西郷文芸学新展開」・西郷模式図（モデル）の完成以後は〈相変移〉という概念規定を適用する方が適切かもしれません。自在に〈相変移〉するということは、〈視点の転換〉を含むもつと大きな概念です。「西郷文芸学新展開」・西郷模式図（モデル）の理解がまだ会内で不十分な今は〈視点の転換〉と〈相変移〉を併用することになると思いますが、将来的には〈相変移〉に移行すべきだと考えます。

しだいに
潜つてたら

巡艦鳥海の巨体は
青みどろに揺れている藻に包まれ
どうと横になつていた。

昭和七年だつたかの竣工に
三菱長崎で見たものと変わりなし
しかし二〇粩（センチ）備砲は八門までなく
三粩高角などひとつもない

ひどくやられたものだ
俺はざつと二千万と見積もつて
しだいに
上つていつた

新宿のある理髪店で
正面に嵌（はま）つた鏡の中の客が
そんな話をして剃首を後に折つた。
なめらかだが光なみうつ西洋刃物が
彼の荒（すさ）んだ黒い顔を滑つてゐる。
滑つてゐる理髪師の骨のある手は
いままさに彼の瞼（まぶた）の下に
斜めにかかつた。

理髪店にて

長谷川龍生

「少年の日の思い出」も1場面は〈私〉の視角から語り

手の「わたし」が語り、2場面以降は〈客〉の少年時代の〈僕〉と、大人になつた〈僕〉・〈客〉のいわゆる《回想視点》《二重視点》、〈僕〉・〈客〉の〈内の目〉から語る《視角の転換》です。語り手は一貫して「わたし」です。視点人物が〈私〉から〈僕〉へ転換するのです。語り手「わたし」の対象が〈私〉から〈僕〉へ変わつた《視角の転換》です。

ちなみに文法的・人称的視点論、読解理論をベースにしている「読み研」(「読み」の授業研究会)の分析を読むと「二人の話者」説をとっています。

「水ヲ下サイ」(『全集』⑯巻)の分析も「西郷文芸学新展開」確立以前の分析で「二人の話者」説ですから修正しなければなりません。従来の分析では1連は被爆した人物本人が語り手、2連・3連は視点が転換して、今まで訴えていた1連の語り手の様子を違つた語り手が語つていると いうものでした。違つた語り手ではなく、1連は語り手「わたし」は被爆者本人の〈内の目〉と重なつて語り(語り手が被爆者本人に相変移し視点人物となる)、2・3連は語り手の〈外の目〉で被爆者と状況を語ります。《視点の転換》に違ひないのでですが、二人の語り手ではありません。〈内の目〉から〈外の目〉に変わる《視点の転換》です。視点人物から語り手に瞬時のうちに切り替わつた(相変移した)のです。

以上のように二〇一九年冬の実践研の論議を整理してみました。異論・反論・補強意見がありましたらお願いします。と修正が必要です。

■小林直樹氏(東京大学名誉教授・憲法学)の訃報に接して

三月三日の朝日新聞朝刊に小林直樹氏が二月八日、くも膜下出血で逝去(九八歳)との記事が載つていました。

西郷先生と同時代を生き、総合人間学会での出会いで意氣投合。牛窓の研究所にも足を運ばれ益を重ね、旧知の友であつたかのような交流を重ねてきました。「文芸教育」八三号に小林先生へのインタビューが掲載されています。西郷先生の命を受け、緊張して小林先生との対談に臨んだことをありありと思い出します—立憲主義とはなにかというそもそも論と主権者教育の重要性、改憲論者の論理破綻、真子さんの結婚問題や天皇退位に代表される皇室の基本的人権の問題、改元騒動と天皇制の問題、グレタさんの主張と自國中心主義と地球環境問題など、改めてその特集を読み直すと、現在の憲法状況と見事に重なり、本質を射ていることに驚きます。また、特別ゲストとして理論研に招聘し講義を受けたことも、静かな語り口とともに古い会員に

は懐かしい記憶だと思います。

貧弱な私の書棚の中で辞書類を除き一番ボリュームがあり高価な書物は、小林直樹氏の名著「法の人間学的考察」（岩波書店）、「平和憲法と共生六十年」（慈学社）の二冊です。先の研究会の折、政治的教養の足りない私たちに、西郷先生が指定図書として読むことを薦めた書物です。今こそ、多くの会員に読んでほしい書物です。ご冥福をお祈りいたします。

文芸研との出会い

千葉松戸サークル 沼澤 賢

「インターネットです。」

沼澤さん誰の紹介でここに来たの？懇親会の席で聞かれた時に答えた一言です。まさしく、現代には欠かすことのできない「ネット」が私と文芸研をつなげてくれたのです。

約2年前、教員として、「もっと勉強したい」「もっと授業が上手くなりたい」と思い、いろいろと検索してたところに、「これだ」と自分の心にヒットしたのが、文芸研のホームページでした。ちょうどその時は、九月で、国語では「一つの花」を授業していました。ホームページを見ながら、「ものの見方考え方」を参考に授業をしてみると、今までより国語の授業がおもしろく、そして手応え感じたことができたの

は、初めてでした。

「一体これは、何なのか」と驚いたと同時に、「もっと知りたい、勉強してみたい」という思いが強くなりました。詳しくホームページを見てみると、BMSが開催されることが分かり、早く速、上西先生にメールをしました。すると、「ぜひ、お越しください」とすぐに返信がきました。当日になり、行つてみると上西先生や山中吾郎先生、そして、西先生など、情熱をもつた先生方が温かく迎えてくださったことは今でも覚えています。それからというものの、月一回行われる勉強会に、ほぼ毎回参加している自分がいることに気付きました。勉強会では、三時間と短い時間ですが、教材分析を中心に、中身の濃い時間を過ごすことが何より、自分の学びにつながっているのだと実感することができました。また、冬休みにもなると、「青年学校」についても教えてくださいました。もっと「文芸研のいろは」が知りたいと思っていた私にとっては、嬉しい限りの場でした。最初は、お金や時間が心配でしたが、全国に仲間が増えていくことに喜びを感じるとともに、熱心に誘つてくださった16期のリーダーの酒井先生のお誘いもあり、青年学校で学ぶことも決心することができました。

青年学校やサークルの学習を通して、ここで続けみようと思つきつかけになつたのですが、温かい言葉です。「文芸研はすぐに役立つハウツーものではないけれど、繰り返し繰り返し学んでいくことで、教師としての大きな礎となります」という山中吾郎先生の言葉や「まだまだ教師人生は長いんだか

ら無理せずゆっくりでいいよ」という松戸サークルの曾根先生の言葉でした。不器用で飲み込みが遅い私にとっては、とても有難く、何よりも嬉しく、支えとなる言葉でした。

私は、生の西郷先生は見たことがない世代です。そんな自分でも、ここで学びたいと思うのは、理論の確かさと同時に、それを乗り越えようとする主体的集団である団体だからこそだと思います。まだまだ未熟者ですが、この文芸研で学び、子どもをしっかりと育てていけるようにがんばります。今後ともよろしくお願ひします。

どんなに素晴らしいモノでも、伝わらな

ければ無いのと同じ。奈良を攻める

大阪文芸研枚方サークル 福崎 健嗣

全国大会参加者空白の県を何とか耕したいと思つています。どんなに素晴らしいモノでも、伝わらなければ無いのと同じです。まずは、多くの人に知つてもらうこと、文芸研に触れる機会を増やしていくことが大切だと考えています。

勿論、我々が、理論を学び理解を深め、よりよい実践を肃々と積み重ねていく、そういう営みが大切なのは言うまでもありません。しかし、そういう「職人の営み」だけでは、組織

ません。経営とか、マーケティングとかいう観点が必要不可欠です。

滋賀県は、二〇一七年から「滋賀湖東サークル・大阪豊中サークル」名義で三回、「国語の教室」を開催しました。この間、近江八幡の先生が協力してくれて会場準備とチラシの配布を手伝ってくれています。今年度、一学期に開催した際には、多少なりとも手ごたえがあったので、二学期も!と思つてはいたのですが、先方が忙しかったようで開催できませんでした。あまり催促するのも気が引けるし、サークル員でもない方に丸投げはさすがに難しいのが現実です。「学習会ができそうなら駆けつけます。」という話と、「また三学期に是非!」という話はしています。

今回、奈良を開拓することにしました。以前から気にしてはいたのですが、夏の枚方集会に奈良からの参加者がいたことがきっかけとなりました。附属小学校と公立小学校から二名ずつ、計四名の参加がありました。

告知の方法は、①チラシを印刷し、各学校に郵送、②教育書関連書店にチラシを置いてもらう、③枚方国語の教室参加者へメール、④文芸研HP、⑤枚方サークルFB、⑥センセイポータル、⑦光村図書HPの研修案内、⑧こくちーず、などです。

最も手間と費用がかかるのが①の郵送です。新規開拓には仕方のない部分かと思います。全国の小学校数は、およそ二

万校（うち、国立七〇校、私立二三〇校）あり、全国大会でもなかなか全校配付とはいかず、悩ましい部分です。奈良県全域とまではいきませんでしたが、会場周辺の光村採択市町村に配付しました。公立小学校からの参加者は学校宛てチラシを見て来てくれたそうです。「第一回とあつたので、ちょっと不安もあつたけど…」と話されていました。次回は「第二回」と書けるので、もうちょっと安心して参加してもらえるかもしません。

②奈良市に新風堂という書店があります。教育書や絵本などこだわりを持って営業されています。文芸研のハンドブックや「文芸教育誌」も置いてくださっている本屋さんです。店内のフリースペースで読書会等もされているそうで、奈良で学習会を開くなら使わせていただくことも考えていました。夏の枚方集会の際にもコチラにチラシを置かせてもらつたところ、「新風堂でチラシを見ました」という方の参加がありました。今回の「奈良国語の教室」のきっかけとなつた方です。残念ながら今回は参加されませんでしたが、ことあるごとに声掛けしていこうと思います。

全国大会であれば、A5ぐらいの少し小さめのチラシを作つて、大型書店にも持ち込んで教育関係の書籍と一緒にお客様に配つてもらうというのもできるのかな？と思つています。

③枚方国語の教室への参加申込は基本的には全てメールで受け付けています。当日参加や口コミもあるので、全員の

メールアドレスが把握できているわけではありませんが、過去参加者の数百人分のメールアドレスが保存されています。また、頻繁に参加されているリピーターにはサークル例会等への参加をよびかけることもあります。一斉送信する場合には、自分のアドレスをToにして、その他のアドレスはBccにするよう気を付けています。ただ、送信した瞬間にエラーメッセージが大量に返つて来ます。絶対存在してると拒否されるはずもないアドレスからもエラーが返つて来る場合があるので、どうしたらいいのか悩んでもいます。

④文芸研HPは、いつも掲出依頼を送つてすぐにアップしてくださるので大変助かっています。滋賀国語の教室の際には、文芸研HPからチラシをダウンロードしてもらってそれをもとに現地で印刷配布してもらつています。これまでの枚方での学習会の参加状況を見る限り、「④⑤⑥いずれかを見て来ました」という方が毎回一人ぐらいは必ずいます。遠方や高校・支援学校の先生など、こちらが予期せぬ参加者が多いです。⑦⑧は最近使い始めました。東書も同じようなページがあつたので、来年度（から枚方は東書）は東書のHPも活用しようと思っています。

⑧「こくちーず」は、サイト内で申込と支払いまでできてしまふので、今後全国大会等での活用もできるのではないかでしょうか。数百人規模の研修会を「こくちーず」で受け付けている団体もあるので、魅力的な方法だとは思いますが、「じ

やあ、よろしく」と言われても自信はないです。今回の国語の教室でも、告知のみで使用し、申込、支払いは利用しませんでした。

今回の「奈良開拓」で一番感じたことは、人とのつながりは最強だということです。

枚方国語の教室に参加してくれた奈良の附属小学校の先生と「奈良国語の教室」開催に関してメールでやり取りしました。「奈良でやりたいと思います。どんな教材がいいでしょう? 場所は? 日程は?」と相談する中で、興味や関わりを深めてもらいました。FBでの告知を、個人と「語り合う文学教育の会」と「奈良県教育サークル連絡協議会(奈良サ連)」でシェア・拡散してくれました。文芸研とは別の学習会でもチラシを配布したり参加を呼び掛けてくれたりしてもらえたようです。結果、FBのアクセス数が普段の四倍程度に増加、見たことのない人からの「いいね!」もありました。学習会に参加は難しくても、「文芸研」に少しでも触れてくれた人が増加したと言えます。そしてまたその人たちからつながりで新しい人たちが「文芸研」をする機会が増えていくのではと期待しています。

今回参加してくれた公立小学校の先生も奈良国語の教室の後、FBの方に「いいね!」をくれていました。今後も見続けてくれれば、学校宛てチラシを送らなくともFBから参加してくれたり、知り合いの先生を誘つてくれたりするかも

しません。FBのアクセス数は、奈良国語の教室の後、四倍を維持・・・とまでがいきませんが、確実に増加していくます。

思えば、枚方国語の教室も最初は学校宛てのチラシ配布から始まり、徐々にリピーターが増え、職場の同僚を誘つて参加してくれる人が増え、・・・という形で参加者が増えてきました。そして、その中から興味を持った人がサークル例会に参加し、サークル員になり、という形で枚方サークルが今までやつて来れたわけです。

次に大切なことは、継続することです。枚方国語の教室も、実施が難しい時や参加者が少ないこともたびたびあります。それでも、とにかく続けてきたことで、「文芸研」が定期的に人々の目に触れ、認知され、「あ、いつものやつ」「今回は参加してみようかな?」「へえ、全国大会があるんだ」を生み出してきました。FBの更新についてもそうです。文芸研につながる情報を発信し続けることで、ふとした拍子に誰かの何かにひっかかることもあります。「いいね!」したり、「シェア」してくれることでも、多くの人の目に触れる機会が増えます。一つひとつは、「ハチドリのひとしづく」や「アリの一穴」かも知れませんが、それを続けていくことで、もしかしたら大きなうねりにつながるかもと信じています。

滋賀でも、奈良でも、「昔、西郷先生から・・・」という

話を聞きました。自分では、そこそこ頑張っているつもりでも、西郷先生が切り拓いてきた道に比べれば、玄関の掃き掃除ぐらいしかできていない感じです。

同時に、五十年かけて、西郷先生が全国に撒いてきた種は、

継続して水やりされていないがために、しおれてしまっています。という現実があるように思います。「かつては市教研に西郷先生を呼んで、公開授業をして数百人集まって・・・」と

いう話をただの思い出話や伝説にしてしまっては意味があ

りません。当時心を熱くした先生たちは高齢化し、どんどん現場を去っています。今ならまだ、「ああ、文芸研ね。

いい勉強になるよ。参加したら？」と若い先生に声をかけてくれるベテランがいるはずです。そんな人が僅かでも残っている今、各地でもう一度、土を耕し水を撒く活動が急務です。そして苦しいけれども水をやり続けることを続けていく必要があります。

誰が？・・・私たちが。



青年学校便り ～1月 大阪にて～

佐々木綾乃

1月11・12日に第2回青年学校が大阪の螢池公民館で開かれました。レポーターの先生から、初参加の先生まで、いろいろな先生方が集まり、豊かな交流ができました。

1日目は野澤智子先生から、「木竜うるし」と新しい教科書教材「帰り道」の講義を受けました。「木竜うるし」では教科書では、音読劇をするための教材となっていますが、権八と藤六がどんな人物なのか、丁寧に読み合わせていくと、二人の関係性や人間性が見えてきました。音読劇をするだけではもったいない教材だなと感じました。二人の登場人物について、意見が飛び交い、楽しい交流ができました。「帰り道」は、二人の少年の間に起こった出来事が、前半は一人の視点から、後半はもう一人の視点から描かれた教材です。視点の学習をするには、ぴったりの教材だと思いました。6年生の子どもたちが感情移入しやすい教材で、描写の違いにも着目し、先生方それぞれの意見を聞いて、たくさん気づきがあり、深い教材研究ができました。二人の登場人物の少年らしい悩みが可愛らしく、参加した先生方が「こここの気持ちわかるなあ」と自分とも重ね合わせて交流していたこともあります、暖かい交流の場に、

なつていたと思います。私もこの教材が大好きになりました。

2日目は前田先生から、1、2年生の教科書教材の講義を受けました。「おおきなかぶ」「くじらぐも」「スイミー」

「お手紙」を、基礎基本から丁寧に教えていただきました。

また、視点、対比や類比、認識の内容など、教材研究の方を丁寧に教えてくださったので授業のイメージを持つことができました。また、つづけ読みの教材も紹介していたとき、教材を子どもたちに与えるタイミングによって、教師が伝えたいメッセージの伝わり方が全然違うことを実感しました。4つの教材をしましたが、あつという間に感じるほど、充実した時間になりました。

青年学校17期2回目の青年学校は体験参加者も多く、新たに2名、仲間が増えました。改めて学ぶことは楽しい。みんなで学ぶことは楽しいのだと感じました。3学期もがんばろうと思える時間になりました。

であります。状況は厳しいですが、山口での大会を成功させるためにも、この実践研で提案レポートをしつかりと討議し、大会の成功に向けて力を合わせて取り組んでいきましょう。

★文芸教育誌と授業シリーズなど、書籍の宣伝、販売、学習をお願いします。文芸研では、編集委員会を中心に、文芸研が積み重ねてきた理論と実践をより読者にわかりやすいもの、今に求められているものという観点で全サークル員のご協力をいただいて作り上げています。サークル活動で、国語の教室で、日常でなど様々な機会をとらえて運動を広げていきましょう。日々の小さな積み重ねが仲間を作つていきます。皆様のお力添えをよろしくお願ひします。

★年会費（一人4000円）は遅くとも全国大会には納めていただくようお願ひします。

☆今後の予定☆

※第五十五会文芸研山口大会（山口県教育会館ホール他）

八月一日（土）・二日（日）

※冬の実践研（神戸）十二月二十六（土）・二十七日（日）

※原稿は全て、3月末時点のものです。

事務局通信

★第55回山口大会に向けて、中国ブロックの皆さんには、準備にお忙しいことと思います。今年度はまた各地での国語の教室、情宣活動も始まっています。今年度は、コロナの影響で、思うような活動も難しかったと思います。の中でも各サークル工夫していただき、準備が少しづつ進ん